生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん　教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥　第　２４　号　令和４年７月８日

人に恋してもらった辞典なんて聞いたことがない

赤瀬川原平『新解さんの謎』

辞書の中から立ち現われた謎の男。魚が好きで苦労人、女に厳しく、金はない―。「新解さん」とは、はたして何者か?三省堂「新明解国語辞典」の不思議な世界に踏み込んで、抱腹絶倒。でもちょっと真面目な言葉のジャングル探検記。紙をめぐる高邁深遠かつ不要不急の考察「紙がみの消息」を併録。たとえば――[ばか]人をののしる時に最も普通に使うが、公の席で使うと刺激が強過ぎることが有る。[実社会]複雑で、虚偽と欺瞞とが充満し、毎日が試練の連続であると言える、きびしい社会を指す。[凡人]マイホーム主義から脱することのできない大多数の庶民の意にも用いられる。　（「BOOK」データベースより転載）

最近、「エモい」という言葉をよく耳にする。僕には否定的な意味にしかとらえられなくて話の中に入っていけない。どうしても「キモい」と「エロい」が混じってしまうのだ。そう考えてしまう自分はつくづくおやじだなと思う。言葉は生き物だというけれど、どんどん新しい語ができて、ついていけなくなってきた。新しい辞書が必要だな。

そういえば２年ほど前に新明解国語辞典が９年ぶりに改訂となり話題になった。新明解といえば『新解さんの謎』。25 年ほど前のベストセラー。辞書というのは誰にでも通じる最大公約数的なものという認識があるが、ところがどっこい、この新明解は違う。その魅力を赤瀬川さん独特のユーモアで次々と紹介してくれるエッセイだ。新明解国語辞典の語釈や用例を読んでいくと、一人の男性の視点が浮かび上がってくる。その人を「新解さん」と親しみ(?)を込めて呼んでいるのだ。その特徴の一つは実際に経験した表現があふれていること。例えば、食べ物。語釈に「うまい」と出てくる。

【白桃】〔黄桃と違って〕実の肉が白い桃。果汁が多く、おいしい。

【あこう鯛】〔赤魚の意〕タイに似た深海魚。顔はいかついが、うまい。

うまい、まずいは人によって違うだろ、と突っ込みを入れたくなる。ちなみに僕の持っている角川必携国語辞典では白桃は「モモの一品種。果肉が白くてやわらかく、水分も多い」とある。ね、違うでしょ。こうなると他の言葉がどう書かれているか読みたくなってこない？今日の名言はそのエッセイの最後の文。辞書は知らない言葉を引くだけのものではなく、知っている言葉を読んでもおもしろいということを実感できるエッセイだ。

だが、しかし、である。言葉は変わるのである。当然、新解さんも時間が経てば変わっていくのである。2020年11月18日（水）の朝日新聞夕刊、および朝日新聞社の運営する本のサイト「好書好日」では「『新明解国語辞典』９年ぶり改訂　「恋愛」「男」「賢夫人」…時代に応じて語釈を手入れ」でこんな風に紹介されていた。

辞書には、個性がある。なかでも『新明解国語辞典』（三省堂）は言い換えに逃げず、細かいニュアンスまで伝えようと、独特の語釈や豊富な用例でこれでもかと迫ってくる。

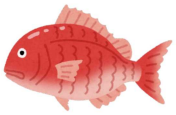
９年ぶりに改訂された第８版が１９日に発売される。〈出来るなら合体したいという気持を持ちながら〉（第３版）と書かれてかつて話題になった【恋愛】は今回、対象が「特定の異性」から「特定の相手」に変わった。

すっかりジェンダーに配慮したスマートな紳士ぶりがうかがえるのである。うーん、僕も成長しなければならない。もう「おやじだから」と言い訳していられないのだ。

そういえば新明解第８版の広告でこんなのがあった。

おやじ ギャグ[4]オヤヂー【親爺ギャグ】

〔おもに中年男性が〕気の利いたことを言おうとして発する言葉遊び。多くの場合かえって顰蹙ﾋﾝｼｭｸを買う。「許してちょうだい」を「許してちょんまげ」という類。「部長が強烈なーを放った」



いや、これはさすがにもう言わないでしょ。